

題目 地域で生活する統合失調症当事者の病いとの「折り合い」のつけ方

保健医療学専攻 看護学分野 精神看護学領域

氏名 瀬戸口ひとみ

キーワード 統合失調症 当事者 折り合い 内容分析 概念分析

I. 研究の背景と目的

精神に障害をもつ人々は、平成 25 年の患者調査では 320 万人余と報告されている。精神疾患は、一度罹患すると長く付き合っていかなければならない慢性の経過を辿る疾患である。慢性の疾患を抱えながら生活するためには、症状のコントロールのため日常生活を修正する必要がある。コービンとストラウスは、慢性状況を抱えながら生きていくときに必要になるアイデンティティのプロセスを「折り合いをつける」と述べた¹⁾。精神疾患の中でも、統合失調症は、患者数も多く、慢性的な経過をたどり、これまでの施策や法制度を振り返っても、長く危険視され隔離収容の対象であった。しかし、2001 年に北海道「浦河べてるの家」で始まった当事者研究をはじめとして、精神障害者が自己の体験を語ることにより、当事者にとっての病いの意味や障害への認識が明らかになってきた。

厚生労働省は、2007 年入院中心の医療から「地域を拠点とする共生社会の実現」をめざし、地域生活への移行をすすめている。現在、社会生活を支えるための社会資源は徐々に整備されつつある。しかし、筆者は、統合失調症者（以下当事者）が地域での生活を継続するためには、自己の体験を認識し症状をコントロールし、人間関係を構築していくなど自分自身の病いと折り合いをつけながら生活していくことが必要なのではないかと考えた。しかし、地域で生活する当事者が、それぞれの人生の中でどのように病いとの「折り合い」をつけてきたのか、そのプロセスを明らかにした研究は未だ少ないのが現状である。本研究の意義は、Rodgers の概念分析の手法を用いて「折り合い」の概念を明らかにしたうえで、当事者の生活史の語りから明らかになった「折り合い」のつけ方と比較統合し、病いとの「折り合い」のつけ方を明確にすることである。「折り合い」の概念と「折り合い」のつけ方が明確になることは、入院生活における看護援助方法と当事者の地域での生活を支えるための新たな知見として援助方法の構築につながると考える。

II. 研究目的

本研究は、Rodgers の概念分析の手法を用いて「折り合い」の概念を明らかにしたうえで、当事者の生活史の語りから明らかになった「折り合い」のつけ方と比較統合し、病いとの「折り合い」のつけ方を明らかにすることである。

II. 方法

本研究のデザインは、折り合いの定義の明確化を行う概念分析と病いとの「折り合い」のつけ方を明らかにする Krippendorff の内容分析およびテキストマイニングを用いたトライアングレーション

ョン方式による質的研究からなる。

1. 折り合いの概念分析

概念分析は、Rodgers (2000) の概念分析アプローチ法を用いて、和論文 32、英論文 2 を対象とし、先行要件、属性、帰結の内容を抽出し、各項目をカテゴリー化し概念モデルを作成した。

2. Krippendorff の内容分析およびテキストマイニングを用いたトライアングレーション方式

対象者は、1 年以上の在宅生活および自分の病いを認識し自立して生活している当事者とし、研究への同意が得られた 9 名とした。得られたデータは、Krippendorff の内容分析およびテキストマイニングを用いて分析した。

III. 倫理的配慮

国際医療福祉大学倫理審査委員会の倫理審査による承認を受けた（承認番号 15-Io-51）。

IV. 結果

1. 折り合いの概念分析

折り合いの概念は、【自分らしく生きる】であることが明らかになった。

2. 統合失調症者が、自己の病いと折り合いをつけるプロセスにおいては、【家族の支援】【仲間の支援】【医師・看護師の支援】を基に【病いの受容】に至っていた。【病いの受容】がなされることで、【セルフコントロール】と【思考の転換】も起こると考えられた。これらのプロセスによって【社会的な役割と活動】や【仕事が生きがい】と社会的な存在としての生活を求め、それを実践し【生活を楽しむ】【今が幸せ】【今は自由】と感じていることが明らかになった。

3. テキストマイニングの分析結果

コンセプトマッピングは、【思う】【薬】の 2 つを軸とするグループが形成された。【思う】の出現頻度は 260 回、関連テキスト数は 141 であった。【思う】と太くつながりが表れていたのは、【よい】【楽しい】であった。

V. 考察

今回、当事者の語りから明らかになった折り合いのプロセスでは【家族の支援】【仲間の支援】【医師・看護師の支援】が【病いの受容】に大きな影響を与えていた。【病いの受容】によって【セルフコントロール】や【思考の転換】が進み、さらにこれらは【病いの受容】に影響を与えることも明らかとなった。【病いの受容】によって当事者は、【社会的な役割と活動】【仕事が生きがい】として社会的な存在としての生活を求めている。当事者が社会的存在としての自分を求め、実践することによって【生活を楽しむ】【今が幸せ】【今は自由】と感じていることが明確になった。これはテキストマイニングの「思う」と「よい」「楽しい」がつながりが太いことからもうかがえる。概念分析で明らかになった折り合いの概念は【自分らしく生きる】であったが、【自分らしく生きる】ことに必要な要素は【社会的存在】としての自己を認識することであった。当事者が求めている【社会的存在】として【自分らしく生きる】ことを支えるためには、まず、入院生活を援助するうえで、当事者に対して社会の一員としての視点を看護師は忘れずに【病いの受容】のために大切にされる経験とこれまでの経験を支持的に受け止め、今後の生活に対して希望が持てるかかわりが必要と考える。

VI. 結語

当事者が【病いの受容】のために不足している支援をアセスメントし、不足している支援が受けられるようにかかわることと、当事者が自らを社会的な存在であると感じられるような支援をする必要がある。